

第10回強制動員真相究明全国研究集会 2017.3.25-26 長野県松本市

(『むくげ通信』282号、2017年5月28日)

飛田雄一



松本駅についてびっくりした。集会の大看板が。

3/25～26、第10回強制動員真相究明全国研究集会が、長野県松本市で開かれた。主催は、強制動員真相究明ネットワーク（共同代表・庵澄由香、飛田雄一）、長野県強制労働調査ネットワーク、松本強制労働調査団。テーマは、「強制連行・強制労働をどう伝えるか？」。会場は、文化財にも指定された木造のすてきな「あがたの森文化会館講堂」である。

以下、報告を列挙する。いずれも内容の濃いものだった。詳細は当日配布の資料集に水野直樹さんの補足資料、庵澄由香さんの当日配布のレジメ、新聞記事を追加して＜資料集・改訂版（A4、140頁）＞を参照していただきたい。（送料とも800円で販売中。購入希望者は、郵便振替<00930-9-297182 真相究明ネット>に800円をご送金のこと。）



基調講演をする水野直樹さん

基調講演「強制連行問題と朝鮮植民地支配」水野直樹／特別報告「長野県へ来た農耕勤務隊～強制動員された朝鮮半島出身の「日本兵」」原英章／特別報告「アジア太平洋戦争期朝鮮人女性労務動員現況」鄭惠瓊／／第2部「強制連行をどう伝えるか？」基調報告庵澄由香／奈良県天理・柳本飛行場跡の歴史を伝えるために」－資料発掘、証言者発見をどう進め、書籍

化はどうした方法で実現したのか－高野眞幸／運動の軌跡・日韓市民共同の営みの動き－川瀬俊治／

「松本市による「松本市における戦時下軍事工場の外国人労働実態調査報告書」の編纂・発行の経緯について」小松芳郎／「強制連行を次世代に伝えていくために－滋賀県から」河かおる／「教材・植民地支配と強制労働」竹内康人／／第3部「明治産業革命遺産と強制労働」／問題提起 外村大／「釜石と戦争の継承－艦砲戦災・強制動員」山本直好／「八幡製鉄所における強制連行・強制労働について」中田光信

他に資料集には、以下の紙上報告等が掲載されている。

「朝鮮人の証言から見る三井・三池炭鉱」広瀬貞三／「北海道から韓国へ遺骨返還の旅」木村嘉代子／「軍艦島」（端島）の世界文化遺産登録問題をめぐる最近の動向 柴田利明／三菱重工業長崎造船所 強制動員被害者の被爆者手帳裁判始まる 河井章子／<資料>「明治産業革命遺産と強制労働」竹内康人／「史料・証言 明治産業革命遺産での強制労働」竹内康人／「世界遺産についての第1次、第2次声明」／松本市長からのメッセージ／フィールドワーク案内 「里山辺：地下工場建設跡を訪ねて」

第10回強制動員真相究明全国研究集会が25日、松本市あがたの森文化会館で開かれた。主に戦時の朝鮮半島からの動員の歴史や実態を調べている研究者ら約90人が参加。国内や韓国での調査成果を伝える必要性を考えた。立命館大（京都市）の南道由香教授が基調報告。若い世代が韓国の音楽に親しみ、朝鮮半島の歴史を学ぶ講義の受講者が増えていることで、「日々の飛行場跡を訪ねて」

松本 全国から研究者ら90人
「強制動員」の研究集会

本人の無関心が変わりつつある。各地の研究や調査の蓄積を広く伝えていきませんか」と呼び掛けた。奈良県天理市の飛行場建設の実態を伝える書籍化の取り組みをはじめ、開墾などで長野県内にも動員された「農耕勤務隊」や、日本国内の工場や炭鉱労働に動員された女性についての報告もあった。

集会は毎年持ち回りで開き、今回は奥強制労働調査ネットワーク（松本市）や強制動員真相究明ネットワーク（神戸市）などが主催した。26日は松本市里山辺や岡市中山の軍事工場跡を調査する。

2017.3.26 水野直樹

●
2日目はフィールドワークだ。松本市内の里山辺地下工場跡を訪ねた。ここには、1980年代に兵庫朝鮮関係研究会の故鄭鴻永さんと訪ねたことがある。入口付近にはアルミニュームのリサイクル施設があったが、許可を得て崖を這い上って中に入った。体重のある鄭鴻永さんが軽やかに崖を登り驚いたことを覚えている。当時キノコ栽培をしていたような記憶もある。

ここは三菱重工業航空機製作所（名古屋）の疎開工場として作られたものだ（以下すべて当日配布の資料による）。この地域の地下・半地下工場でゼロ戦の後継機といわれた「烈風」などの部品製作と機体の組み立てが計画されていた。

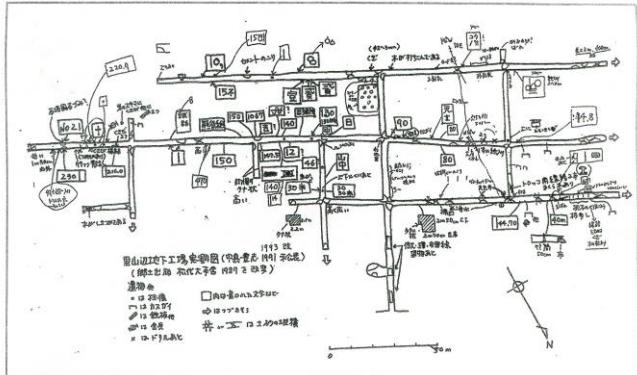
貸切バスと自家用車をつらねてフィールドワークが始まった。45人乗りのバスは満席で補助いすも使用されていた。バスの中での解説も分かりやすく適切なものであった。到着後、3班に分かれて地下工場跡に入った。



地下工場跡の入り口

資料によると以下の図のような構造になっている。入口付近に信州大学の宇宙線研究施設が設置されていたことがあり、逆にその骨組みのおかげで入口が崩れずに保存されているとのことだ。それぞれの班は、それぞれに時間をかけて説明を聞きながら見学した。中で当時をしのんで懐中電灯を消した。当然のことだが明かりがすべてなくなると目の前1センチに手を近づけてもその手が見えない。（余談だがこの暗黒の世界が長野善光寺地下にある。参拝料/入場料を支払うが一見？の価値がある。）

4. 現存する地下工場跡：調査図



以下のような証言が残されている。

「なにせ、岩山で、かたいこと、かたいこと。まず、ハッパで穴の奥をくずしてから掘りすすんだんですが、かみそりのようになった石を踏んでるので、地下たびはすぐに切れ、ワラぞうりは、半日ともたなんですね。穴に入るとき、二足ぞうりを腰にぶら下げてはいるんだけれど、みんな切れちゃう。ぞうりつくりをおそわって、じぶんでつくったんだが、おいつかざう、ハダシが多くて、足からいつも血がでていました。」（1910年生まれ、K・Iさん）



中はもちろん真っ暗な世界だ



「熊谷」の名前がみえる



ダイナマイトを差し込む穴が残っていた



トロッコのレールも残っていた

当時の里山辺村村長の記録によると 7000 人にのぼる朝鮮人が建設工事に従事させられていたという。付近の中山地区には 503 人の中国人が労働させたれており、その名簿が残っている。現地の調査グループは朝鮮人・中国人の調査を引き続き行っている。

●
来年の第 11 回の研究集会は、3/17-18（2018 年）、沖縄で開催されることが決定されている。詳細は今後つめられることになるが、「朝鮮人軍夫」の問題がひとつつのテーマとなる予定である。